

# お笑い芸人就職事情

増田晶文

お笑い芸人をめぐる回り舞台は、1980年のマンザイブームを機にゆっくりと動き出し、90年代のパラエティ番組の興隆と吉本興業が覇権を確立したことで加速、ここへきて完全に場面が変わった。

今やお笑い芸人は、かつての映画俳優や歌手、アイドルと同じ“スター”だ。若者たちが理屈なしに憧れる存在、人気とカネと羨望を一身に集める成功者のシンボルに他ならない。お笑い芸人はカッコいい——島田紳助や明石家さんま、ダウンタウンらはテレビを席卷した。彼らはお笑い芸人の枠にとどまらず、書籍やCD、ドラマ、映画……あらゆるメディアやシーンで成功を取めている。有名女優、タレント、女子アナもお笑い芸人や関係者になびく。各種の意識調査やブログの自己紹介欄で「好きなタイプはおもしろい人」という女性が目立つのは、お笑い芸人を取り巻く世相を如実に語っている。

思えば、お笑い芸人は芸能史の中でずっと最下層の扱いを受けてきた。そんな彼らがトップポジションに登りつめた——これはパラダイムシフトと表現しても過言ではあるまい。

吉本の林裕章前会長は生前、「80年代までは添え物扱いやった芸人が、90年代に入って知らん間に必需品になってしまった。神風が吹いたんですわ」と豪快に笑い飛ばしていた。

彼の言う「神風」にはいろいろな要素が交錯している。まず、バブル経済崩壊でテレビ制作費が削減され、ドラマや歌謡番組より安手なうえ視聴率の見込めるバラエティに注目が集まったことが大きい。

マンザイブームや「ひょうきん族」などを通し

て、当時の子どもたちがお笑い芸人のおもしろさを認識できたことも、ボディブローのようにじわじわと効いた。彼らがトレンドの中核を担う年齢になったのが90年代だ。子どもたちは親の世代に根強かった芸人を卑下する意識まで吹き飛ばしてしまった。彼らが家庭を持つようになり、その子らも“親譲り”の感覚でお笑い芸人を捉えている。また癒しブームや自分探しシンドローム、日本人全体の教養が低下し安直な刺激に反応する傾向も、現在のお笑い芸人が活況を呈する状態をアシストしていよう。

お笑い芸人を目指す若者たちは、お笑いの養成所を目指す。近年では親ばかりか、教師までもが子や生徒が芸人になることを容認するようになった。

吉本の吉本総合芸能学院（NSC）、人力舎はスクールJCA、ナベプロがワタナベコメディスクール……有名プロダクションが経営する養成所は、東京、大阪だけで40校近くもある。いずれも芸人志願の列が引きもきらない。最大規模を誇るNSCは毎年東西で1000人以上の生徒を呑み込む。

養成所のおかげで間違いなくお笑い芸人の裾野が広がった。「お笑いを学校で学ぶ」スタイルは、連綿と続いていた弟子制度を崩壊させた。特に漫才やコントを目指す若者で師匠に弟子入りするケースは稀になりつつある。現在、お笑い界で厳然として徒弟制度が残っているのは落語だけだ。辛抱、努力、克己といった言葉が連想されるうえ、不条理が罷り通るイメージの強い弟子生活という枷が取れたことで、芸人への門戸が一挙に開放された。たとえ玉石混交であろうとも、分母が増えれば、優秀な才能がそこに存在する可能性は高まる。

その反面、安易な気持ちで芸界を目指す者を、いたずらに助長した事実も否定できない。志願者の大多数は「芸人」といつつも、実はテレビで人気者になること、いわばタレントになることを欲している。彼らは、舞台上で芸を磨き、一生かけて芸人の道を究めたいわけではない。ただ電波の寵児になりたいだけだ。このような流れが続けば、やがて本来の意味の「お笑い芸人」はレッドデータ入りし、芸人の定義までもが書き換えられることになる。かくして、日本からまたひとつプロフェッショナルの領域が消えていく。

養成所を出ても先行きが輝いているわけではない。先ほどのNSCの例だが——2003年度の東京校入学者543人のうち、卒業したのは300人だった。その内、晴れて先陣をきって卒業直後から劇場に出演できたのはわずかに7組しかいない。芸人がブレイクするまでに何年もかかるケースもあるが、この学校の一期生で現在も生き残っているのは品川庄司ら2組だけという事実は芸界の奥深さと険しさを突きつけてくる。

堀江貴文は2004年11月20日付の朝日新聞別刷りで、こう言い放った。

「頭がいいとか、運動能力が高いとか、芸術的な才能があるとかって、絶対的な基準で比較はできない。でも、稼ぐおカネで推し量ることはできる」

彼は、おカネで買えない価値があるという言い草は努力が足りないことに対する言い訳、とまで強弁している。当世若者気質とホリエモンの思想は通底している——そんな社会学者の意見をどこかで読んだが、ならばお笑い芸人になんぞ、ならぬほうがよい。芸界には絶対的な価値基準など存在しない。値打ちを見つけるのは自分であり、芸能プロダクションであり、最後は客だ。芸人に才能があって当然、それをいかに磨くかが大事なばかりか、運までも手元に引き寄せなければいけない。誰が、どんな芸風が売れるかわかっていれば、これほど楽なことはないし、逆にそういう世界だからこそ明日に賭けることができる。

確かに、お笑い芸人には前述のさんま、紳助、ダウンタウンをはじめ多くの1億円プレイヤーがいる。とりわけ、さんまに至っては20年以上も

年収1億円を突破しているのだから、プロスポーツ選手をも凌駕する実績だ。しかしその一方で、売れない芸人の悲惨な話は山ほど転がっている。吉本では最低ギャラが100円だ。しかも、そこからしっかり源泉徴収をされる。それでも若手は舞台に立つ。アルバイトはもちろん、場合によっては親へのパラサイトも仕方があるまい。

生活が苦しいのは売れはじめる頃だという声も多い。中途半端に仕事が入ってくるうえ、稽古を重ねる必要もあるからアルバイトに行く時間がとれない。そのくせワンステージのギャラは1500円そこそこと安い。麒麟はすでに売れっ子だが、「当時は餓死という言葉が真実味をもって迫ってきた」と話していた。

この世界にはキャリア10年未満の“若手”を対象にした漫才コンテスト「M-1グランプリ」がある。去年も3000組を超すチャレンジがあった。その中で準決勝へ進出できるのは東西で70組に満たない。このクラスになると、たまにテレビから声がかかるし、舞台に立つ機会も多いから何とか生活していける。およその話で恐縮だが、同年輩のサラリーマンの月収程度は稼げるだろう。ボーナスがないから年収では劣るけれど。

バブル経済の頃は3Kといって一部の職種を敬遠する風潮があった。だが芸人は、それをも凌駕する厳しく激しい職業だということを認識しなければいけない。それでも笑いで食っていきいたいという意気込み、売れるという根拠のない自信を持たねばやっていけない。

しかし、笑いは立派な自己表現だ。同時に、芸人になることが自己実現に結びつくからこそ若者はお笑いの世界を目指す。だから、お笑い芸人志願者たちを、無気力で目標を持たないニートやフリーターたちと十把一からげにするのはどうかと思う。

こんな時代に夢と希望を持つことができるうえ、笑いが極めてアナログだという事実——お笑い芸人という職業が彼らを魅了する要因は、そこにこそ隠されているはずだ。

ますだ・まさふみ 作家。